近代文芸・資料複刻叢書第四集
昭和三十八年十二月十日発行

定本 圓朝全集 全十四巻
〈巻の七〉
限定版 五五〇部 定価千弐百円 〒三〇

第	限	定	版

校訂編纂者
圓朝會代表者 鈴木行三

発行者 松本富夫

発行所 株式会社 世界文庫
東京都目黒区原町一、三五五番地
電話 東京七一三局九二四四(代表)
振替 東京七八四九八番

序

天は二物を與へずとて牙あるものには翼なく。翼あるものに牙無きは數の免れざる所にして。美男子に金が無く。醜男に金持の多かるに均しかるべく。儘にならぬが憂世ぢやと誰やらは嘆じたれど。獨り牙有つて翼を備へ。好男子で金持なるを誰かといふに。我友三遊亭圓朝其人なりけり。何を以て然稱するかといふに。凡そ藝を演ずる者は。特に脚史を作る者ありて。之を演活すと演殺すとに上手と下手の別あり。然れども偶々俳優にして作意のあり淨瑠璃の太夫にして語り物を緩る者無きにあらねど。何所等も二半で一本立つての用には立たざるべし。然るを圓朝子が講話に絶妙なるは。予が辯を待ずして諸君の知しめさるゝ所なりかし。其の演ずる物は古人の跡を追はず。自から脚史に意匠を練り其編む所の非凡なる。尋常著者の及ぶ所にあらず。此故に子は辯に牙あり意匠に翼あり。況んや辯の美しかる源氏業平の美を欺き。意匠の無帯藏なる。豪富の弗箱にも讓らざるべければなり。此書は近世名人を以て聞えし人々の奇話を探り求め。例の巧辯を以て席上の講話と

せられしより。歌舞伎座の新劇にも登りやまと新聞の紙上にも顯はれて。俱に江湖の喝采を博せり。這度春陽堂主人は予に乞うて之を例の小冊とせられしが。其賣るや恰も翼ありて飛ぶ如くならん歟と、よしなき事を述べて端書に代るになん。

明治二十六年五月猿樂町の草廬に

新樹の朝露を硯に受けて

採菊散人記

名人競は、やまと新聞に掲載されたもので明治二十六年春陽堂より單行本として發行された時に、錦の舞衣と改題したものゝやうであります。毬信お須賀の物語がトスカの翻案であることは、偏く人の知るところであります。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

名人くらべ

（錦の舞衣）

圓朝全集　卷の七　目次

口　繪　圓朝自畫贊「花」俳優樂語見立三十六家撰の内、圓朝、岩井半四郎、（守川周重）錦の舞衣口繪（武内桂舟）

名人くらべ……（序　採菊散人）……一
（錦の舞衣）

熟海土産溫泉利書……（挿畫　大蘇芳年）……一九九

黄薔薇……三八九
（毒婦似李傳）

名人競（錦の舞衣）

一

爰に辯じますお話は天明、寛政、文化、文政、天保、弘化時代の藝人から諸職人、或は書家畫工狂歌師作者等に至るまで、名人と名の附きました人の身の上の變ったお話をポツ〳〵集めまして、之を名人競と表題を致して種が出來る度に演る心得でございます。名人になる人の行ひは異ったもので、斯ういふ馬鹿氣た事が有ったといふ昔物語を聞いて居りますが、圓朝が修業中に能く小言を仰しやるお方が、「圓朝などは何うも高座でばかり噺をするからいかん、それでは決して上手にはなれん、宅にゐても歩いて居っても、寢てゐても御膳を食べながらも、常住座臥共に噺をして居なければ、とても名人になることは出來ない、高座で演る時ばかりだからいかん、それに唯聽衆の氣に適るやうに話さうといふ念が此方に出て來るとな、本當のことは出來ない、不斷演って數を掛けてゐれば、自然に慣れて安らかに高座で出來るやうにならんければ、決して上手に話せるものでない、長唄でも清

元の師匠でも、常磐津の師匠でも、不斷やりなれて其の席に臨んだ時にも、稽古の數が掛つて居るから、柔らかにむつくり出來る、何でも數を掛けなければならん。と斯う仰しやつた方がございます。成程然うやりたう存じますけれ共、何うも延續けに不斷噺をしてゐることは出來ません。唯耳に諸々の音が聽え、眼に諸々の物が見える、是だけの物を身に有して居るんですから、よしや始終一生懸命に噺をして居りましても、ガラ〳〵〳〵と車の音がするから見ると、二人乘で、年の頃二十四五といふちよつとした年增盛りで、上布の帷子に繻珍の帶を締め、頭の拵へから何から一切道具が揃つて、餘り厚ぼつたくない質で人柄の好い……彼と合乘をしてゐる奴は、あの何うも髯つ面の、眼の大きな、段鼻のでく〳〵老爺が……といふとお噺の方は無くなつちまひます。詰らん事を氣にしたもので。彫刻師が一心に不動さまを彫るを、不動心と云つて、動ぜず、動かず、他に少しも念のない處が不動心、それで彫上げれば本當の細工も出來ますが、彫つてゐる中に色々な物が見えたり聞えたりして○「久次行かねえか、直に。久「待ちねえ、今不動のケツを彫つてゐるから。なんて怪しからん事を云ひます。唯念々それに成切つて、他念といふ事を去つた時に始めて妙と云ふものが顯はれると斯う仰しやつたお方が有りますが出來ません。お學問をなさる書

生さんでも本に向つた時ばかり書物を讀んでいらつしやると忘れます。本が無くつても歩きながらもちやーんと腹の中で本を讀んでいらつしやると宜しいが、カチーン、トン。○「あゝ、楊弓場か、僕は行きたいな。なんてえと本は無くなつてしまひます。絶えず本を讀んで居らんでは大學者には成れないと仰しやいましたが、成程左樣でございませうし上手有れども名人なし、名人は尊い者でございます。丁度天保の年間に、先年芝居で演じました舞扇恨の刃と題しました狂言に、詫間采女と申したのは私の方では、狩野毅信と申します。其人と三代目荻江伊三といふものを守立てた人といふのは、北川町（深川）の近江屋喜左衛門といふ大家の旦那、此の人は誠に藝嗜きでございます。實にえらいお方で、若い時分から金銀に御不足が無いから諸大名へお金御用を勤めました。只今あの澁澤榮一樣のおいで遊ばす福住町の彼處が近江屋さんのお宅で、あの河岸を近江屋河岸と申しました、倉庫でずうッと取卷いて、中に普請をなすつて庭を廣く取り、毎晩御酒を飲る時に出入の者殘らず藝人を呼んで、指物師から大工左官まで出入の者をずうッと五十人ぐらゐ集めて酒宴をなすつて、色々の藝を見たり聽いたりするのを樂みになすつたが、其のくらゐだから御自分も、河東節も一中節も上手で、其中にも荻江露友に目をかけましたといふ話は、只今

に吉原邊でも口碑に殘つて居ります。其頃都一兼といふ者があり、それにまた幇間でも壽樂、鳥羽屋五蝶などといふが有り、深川の盛んな時分で、其頃何れも大層流行りました。それに吾妻屋の金八といふこれは小間物屋で、今で云へば糶呉服商の金屋仙之助(竺仙)といふやうな人で、誠に品を賣るのが上手で、此人に喋られると自然に品物が好くなつて來て、何だか欲しくなつて買ふ氣になる。この金八は何んな緊つた奥さんの側へ行つても只今の三時間も話をして居ますと、うか〳〵百兩ぐらゐの買物をする氣になるといふお話ですから、何處に愛敬が有るものか分らんが、商ひが名人だと云つて近江屋喜左衞門樣が大層可愛がり、毎も供に連れて歩きます。其他幇間の壽樂に都一兼吾妻屋金八で、喜「かう、多摩川へ鮎漁に行かうぢやアないか。壽「何うも結構。喜「宅へ來るもので元は砂村にゐたが、彼方へ養子に行つたんで、布田の先で、多摩川の鮎漁に來たら寄つてくれつて、木山爲右衞門といふ人だ、堅いもんだね、彼方へ行つてもちやん〳〵と相變らず顔を出して、些少の物でも、茄子でも黄瓜でも持つて遠い處から來る志が可愛いから、お前の處へ今度鮎漁に行つたら、寄つてやらうと云つたら大層悦んだ。壽「是れは入つしやいまし。喜「そんなら往かう。と云ふので、其頃の事だから船の中へ辨當を入れて朝早く出まして、深川から牛込

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

の揚場へ船が着きます。是から上つて、旦那はお駕籠で、後の者はぶら〳〵歩きで、四ツ谷通から新宿へ掛り、五宿へ出ますと、五宿に橋本といふ只今以て家が殘つてゐます。其處へ行つて皆泊りました。此の五宿と申すのは石原村に上下、布田も上下があり、外に黑龍といふ宿があつて五つになりますから五宿と申します。皆思ひ〳〵の駄洒落或は藝盡しがあり、大陽氣に騷いで、明日川へ往くには辨當拵へは斯々にして遣せと橋本へ誂へて、是からド布田村の横町を曲つて三町許まゐると田畠、それから河原道を又五六町參りますと多摩川の流で、先觸が出て居りますから最う船を繫つて待つて居ます。薄緣を五六枚敷いて大きな船でございます。皆其の中へ入りましたが、是は石を運ぶ石船で、薄つぺらなペカペカしてゐるので。七輪が入つて〻爲右衛門さんが宅で漬けた味噌漬のお香々が入つて居ます。爲「さア此處へ來なせえ〻壽「成程是は屋形と汁醋しの間で屋根が高くて宜い、何うも是は好い景色でげすな、ずうつと一體に見える處が妙ですね。壽「好い景色だのう。壽「好いたつて有りません、ねえお師匠さん何うです、好い景色ぢやア有りませんか。一「本當に私は多摩川は噂にばかり聞いてゐたが、斯んなぢやないと思つたわ、水の綺麗な事、水が動いて流れるね。壽「動かずに流れることア有りません、魚がゐて動くのが透通つて見える、

＊タカセ舟へ屋根をつけたやうな形の船。

滅相に綺麗ですね。二「欲しい石がある……私は箱庭を拵へるのが嗜きだが、何うも取れない、もし壽樂さん、彼處にある石を取つておくれな。壽「船の上から見て好い石だと思つて拾ふと、又他のが欲しくなつて、彼も是も拾ふのは宜いが、持つて行くのが荷になつて困りますよ。二「困つても宜いから取つておくれよ。壽「えゝ成程、あなたが何ですか爲右衛門さんで、何ですね、薄縁が幾枚も敷かるんで……この何うも廣蓋の何うか縁が取れ掛つてゐて、尾張燒の大丼に小皿の樣子が宜いぢやア有りませんか、一體に靑くなつてゝ何だか分らん樣な厚ぼつたい出來で、箸が塗箸で、えへゝ面白いね、斯ういふ處が感心ですね。壽「好いのう、此の位の景色の處は無いのう。壽「是は有りません、是は多摩川のなんですかえ。壽「何、何を。壽「あのそれ神田の昌平橋の乾物屋の。壽「それが何うしたんだ。壽「矢張此方から出ましたのかえ。壽「彼は家號で、是が何か六多摩川の中だと云ふの。壽「六多摩川てえのは、山城だの奥州だのと方々に在るんですか。壽「本當はたはがはといふのだ。壽「へえー、何ういふわけで。壽「何だか萬葉集などにたはがはとある、甲州と武州との間に「たは山」といふが有つて、それから流れ出るからたはがはといふのだとよ。壽「へえー異な名で、誰だつてたまがはてえます、たはがはといふのは有りませんよ、云ひ難う

ございますな、寶珠のたは、狸のさんたは、云ひ難うございますなア。喜「それとは違はアな。壽「何しろ何が入つてるのですかえ、お辨當は喰はないのですか。金「後から橋本が辨當拵へをして持つて來るんで。壽「何しろ好い景色で、布を晒すてえ事を聞いてますが晒してゐませんね。喜「此邊ぢやア晒してゐないが、好い景色で堪らないの。壽「先刻から痒いと思つたら多摩川には蚋が隨分ゐるね。金「餘程大いのが居るよ。壽「痒いと思つたら斯樣に膨れました、眞赤に何時の間にか斯樣になつちまひました。一「おや眉間の處を螫して大層膨れたね、おほゝゝ壽樂さんの顏の好い事、宛で何うも何だよ地藏樣の樣な顏になつて。壽「地藏樣などは不緣起ですね。一「壽樂さんお願ひだからあの石を取つておくれよ、些と働くと宜いよ、中は淺いよ。壽「淺いか深いか知れませんよ、爲右衞門さん淺いかね。爲「なに大概踝位で、も些と深え處もあるがね。壽「ぢやア這入つて見ませう。尻を端折りまして、「お師匠さん然う急いたつていけませんよ勝手が知れないから、是は何うも子供を連れて來たかつた、好い心持です、船の上からは樣子が能く見えますが、歩くと滅相に足が痛い。爲「お前樣蔓草履を穿いて這入らねえと足が痛えよ。壽「成程川草履てえのは是から始まつたんですね、土地の者は慣れて居ますな、もし然うちよい〳〵と船の中から彼を此をと云つた

つていけませんよ、あの石は餘程大きうございますぜ。二「宜いよ、私も中へ這入らう。壽「お這入んなさい、褄を確かり取つて袖を結んでお貰ひなさい、金八さん一兼さんの袖を結んで上げて下さい、お手を引きませう、師匠の手を引く事はありませんからな。二「淺い事ね、壽樂さん其れを取つておくれよ。壽「水の中で見ると艶がよくつて樣子が好い樣ですが乾いた處の色を見るに餘り樣子が好くありませんぜ。二「水の中で綺麗に見えたつて宜いから彼を取つておくれよ。壽「さうは持切れませんよ。二「袂へお入れな。壽「大變ですね。二「是は好い石だね。壽「宜うございますが、然うは這入りませんよ。二「懐へお入れよ。壽「歩けやァしません、斯樣に持つちやァ仕樣がありません何うも。二「然うやつておいでよ、手の上に載けるから。壽「是は重たいね、斯う手が塞がつてゐちやァ蚋が螫しても追ふ事が出來ない。二「うふゝ、壽樂さん、お前額を蚋にさゝれてまるで地藏樣だ、手を合せて其上に石が載かつてる處は。壽「お止しなさい、旦那一兼さんが私のことを地藏樣だつて。喜「それは酷いや、何うして地藏とは見えない、何處か三目小僧の相がある。壽「尙惡うございます、何しろ甚く腹が空つて來ました、爲右衛門さん何は、鮎を漁るのは。爲「今支度をしてゐますが、通常では澤山漁れませんから、跳網にして鮎の跳込むとこを御覽に入れたい、ほら

彼處へ今來ました、向うの方から此方へ下つて來るだ。成程と一同が見てゐますと、大きな網に綱が附いて居て、これに笹などが附いて五六人でさー／／／と下つて來ると、鮎が驚いて網の中へ跳込みます、一時に十尾も五十尾も這入ります、ピシャ／／／。壽「あゝ是れは何うも有難い、此方へ來て下さい、宜しい、金八さん、こゝの鮎の美味いことは不思議なんです、何處で鮎を喰つたつて、多摩川で漁れた鮎を其晩の内に江戸へ送つて、料理茶屋の手に這入るまでは、ちよいと時刻がかゝつて居ますが、漁れる直つてんだから、是は何うも有りません、鮎は漁れるとしたところが、お酒は何うしたんだらう、まだ來ない、金八さん、橋本は何うしたんで。金「萬事言附けてあるんだよ、忘れたか知らん。壽「心細うございますな、忘れちやア、何うしても酒が無くつちや仕方がない。金「今に油が來たら天麩羅にしようと思つてる。壽「何にしたつて何にも無いんだから、鮎が漁れたつて仕樣がありません、爲右衞門さん鹽が來てゐますかね。爲「鹽は忘れましたよ、好い鹽でなければならねえと云ふからつい船の中へ入れて來ませんが、もし鹽氣が無くば味噌漬の漬物を一つ水で搾ろと宜い。壽「鮎が漁れたつて　鹽も無ければ醬油も無いんだから附燒にも出來ない、忘れたつて仕樣がないな、腹が空いて、旦那私は石を拾ふのでざぶ／／歩いたので

餘程腹が空きました、困つたが何うです金八さん忘れたらうか。金「滅多に此位のお客様を扱ひつけないから、取逆上て忘れてしまつて來ない日にやア大變で、それとも後からそろそろ來るかも知れない。壽「旦那金八さんがからかつていけません、腹の空つてる處でそんなことを云はれちやア心細うございます、もう來さうなものだ。見て居ますとびしや〳〵向うから草鞋を穿いて、片手に大きな岡持を提げて、其中に一切食る物が入つてゐます。壽「あ彼れだ、來ました〳〵橋本の半纏を着てゐます、おーい此方だよ、彼方へずん〳〵往きますよ、此方だてえに、此方……彼奴、おーい聞えねえかな、暢氣なものだ田舍の奴は。爲「いくら呼んだつて駄目だよ、歩く處を知つて居るからだん〳〵と淺え處を選つて來るから長えや。壽「なる程是れは恐れ入りました、今爲右衛門さんに未下刻と聽いてげつそり腹が空いて來た、有難い、大丼に芋の煮轉ばしの中へ、こてと無茶苦茶に柚子を擦込んで、玉子燒は思ふさま堅いのが宜いてんで、蛋白がとぐろを卷いてゐる處が不思議で、田舍は又宜うございますな。喜「宜いのう、喫つて見な。壽「有難うございます。喜「燒鹽も入つて來たから、早く鮎を燒いて持つて來な。と皆空腹になつてゐます處へ一尾の大きな鮎を燒いて持つて來たのを、多勢が一時に箸を出したから、まるで紙屑拾ひが掃溜で喧嘩をし

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c